

未来に向かって伸びる鶴嶺の子 鶴小だより 11月号

茅ヶ崎市立鶴嶺小学校
校長 日高 大司郎
令和7年11月4日発行



非認知の力、育てませんか？！

難関国立大学、東北大学が、入学試験について、2050年までにAO入試（総合型選抜入試）を100%にすると謳っていると知りました。

AO入試とは、一般選抜入試とは異なり、ペーパーテストによる評価の他に面接や小論文による評価を加味して合否を決定する多角的な試験形態です。この大学、たとえAO入試ではあっても、学力試験も課しています。学力は今までと変わらず求めていくということです。しかし、変わらずに学力だけを重視するなら、入試制度を変える必要はありません。ここには、大学側に、「そうすべき理由」があると考えるのが妥当です。

そこで、来年度の入学者選抜方針を読んでみました。そこには、求める学生像が出ています。

- ・高等学校等で幅広い教科目を履修してすぐれた成績を収め、論理的思考力や問題発見力、分析解決能力、豊かな創造力、発想力、表現力、コミュニケーション能力を有すること、さらに、倫理性や、学問の課題に主体的にリーダーシップを発揮しながら他の学生と協働して取り組む態度を備えていることを求めます。

いかがでしょう。その理由が見えてはこないでしょうか。普通、学力と言うときには、テスト等で測れるもの、「認知の力」を指します。この大学の入試制度改革は、その力と共に、別の力をも求めようというのではないのでしょうか。

その力とは、「非認知の力」です。言い方を変えれば、テストでは測ることができない、「見えざる学力」です。実はこの力、乳幼児期の教育の中で、ずっと重視されてきたものです。けれど、乳幼児期は言うに及ばず、生涯に亘って影響すると今盛んに言われているのです。この大学は、入試制度を変えてでも、その力をもつ多様な人材を欲しているということです。同時に、「非認知の力」がこれからの世の中を生きていくときに、非常に重要だと考えている証拠です。それでは、「非認知の力」について、改めて確認しておきましょう。

◎非認知の力とは、自己と社会性の力のことです。

【自己の力】自分を大切に、適切にコントロールし、もっと高めようとする力

→自尊心・自制心・粘り強さ・自律性等です。

【社会性の力】集団に溶け込み、人と関係をつくり、維持していくための力です。

→心の理解能力・共感性・協調性・道徳性・規範意識等です。

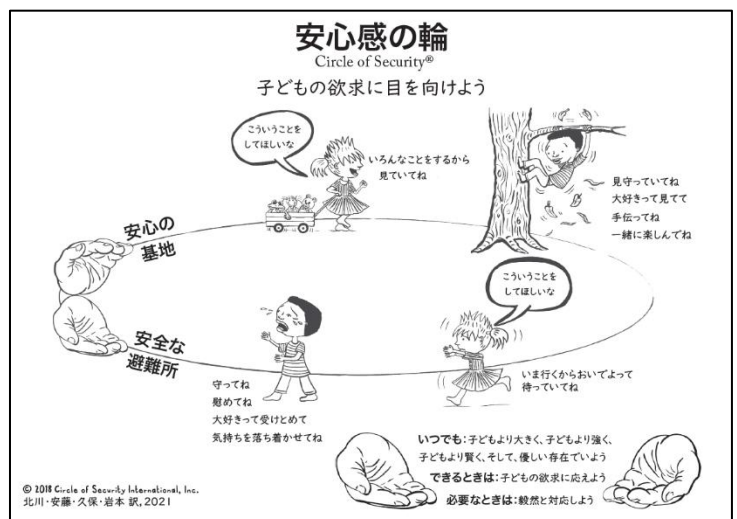
この非認知の力について、OECDレポート（2

015）の中では、こんな報告がなされています。

- ・「非認知の力」が所得の高さに関係している。
- ・非認知の力が高いと学力も高いと言える。けれど、学力が高いとしても非認知の力が高いとは言えない。

学力（認知の力）は、もちろん大切です。しかし、それを支える「非認知の力」は、それにも増して大切にしなければならないと、入試制度改革やOECDレポートは告げているのです。

この「非認知の力」の育成を意識したとき大切になるのは、アタッチメント理論に基づく、安心感の輪をしっかりと回すことだと言われています。



上の図は、上半分と下半分という見方をします。上半分の子どもたちは、養育者の元を離れ、「自分のしたいこと（遊び等）」に取り組んでいる状態です。その過程で、怖かったり上手くいかなかったりなど、危機的な状況（子どもにとって）に遭遇した時に、下半分に移動して、養育者にアタッチ（くっつく）することで感情を立て直し、再び上半分に戻っていくというサイクルです。

まず理解して欲しいことは、上半分にいる子どもたちは、主体的に活動しているということです。つまり、自分で考えて、判断して行動している状況なのだとすることを忘れないでください。ここに、手や口を出すことは、子どもがそうする機会を奪い、「非認知の力」が育ちません。だから、背中を押し、見守ればよいのです。一方、子どもがアタッチしてきた時には、しっかりと受け止め、子どもの感情を立て直してください。それだけです。起こった危機をどうするかは、子どもが決めます。

この輪を回すための養育者の役割は、しっかりと受け止め支え、そして背中を押し見守ることだけです。これをきちんとできれば、「非認知の力＝見えざる学力」は育っていくのです。